第 3 章　緑視向上の取組み

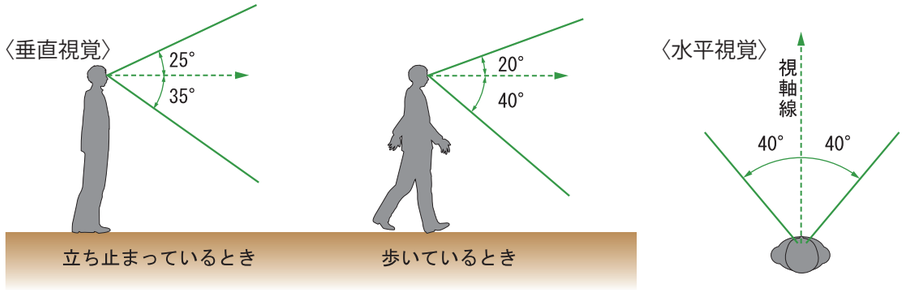
1 緑視の定義

緑視とは、実際に人が目で見た時の視界に入るみどりの量としており、平面的にみどりの量を計算する緑化率とは異なり立体的なみどりを感じるものです。また、**多くの市民の目に触れる場所へ高木を植栽するなど、立体的なみどりや季節感を感じるみどりを重点的・効果的に配置することで、みどりの量的効果以外に人々の心に癒しや潤いなどの心理的効果をもたらすことができます。**

ここでは、みどりの演出の観点から接道部の生垣、高木によるシンボル植栽、壁面緑化や屋上緑化のほか、エントランス部のプランター植栽やハンギング植栽など、人や車の動線に効果的なみどりを配置する取り組みを紹介し実施を促すことで**緑視の向上を図ることを目的**としています。

2 人の視野角

人が目で見て認識する角度（視野角）は、下図のとおり垂直方向に約 60 度、水平方向に約 80 度といわれています。歩いているときは、やや下向きの角度になります。



したがって歩道などでは、植栽帯への低木植栽や花卉植物の設置など、人の目線から下方への緑化を工夫することで、より多くの緑を感じることができます。

また、駅前広場や施設のエントランス部など人が立ち止まる場所などでは、視野を広くとろうと行動することから、アクセントとなる植栽計画が効果的です。

3 緑視を増やす

具体的に緑視を増やすためには、生垣やコンテナ・プランター植栽など、自然と人の視線に入ってくる緑を活用することが有効です。特に、花木や草花をアレンジすると、親近感が湧きます。右の写真のとおり、高木植栽の直下やエントランス周辺など小面積でも設置が可能で、積極的に活用したいものです。

4 緑視向上の取組み事例

ここでは、みどりの演出という観点から、接道部の生垣や樹木の植栽、エントランス部にコンテナ・プランター植栽を設置するなど、人の流れの動線に効果的な緑化の取り組み事例を紹介します。

シンボル植栽

施設を印象づけ、地域のランドマークとなる植栽は、遠景での緑視向上につながります。

コンテナ・プランター植栽

比較的簡易に設置できるのが特徴です。目線より下への設置となり、近景の緑視向上につながります。

接道部植栽

道路に連続するみどりは、歩道・車道を利用する市民に対して近景・遠景の緑視向上効果が期待されます。

街路樹植栽

整然と植わる街路樹は、歩道・車道を利用する市民に対して近景・遠景の緑視向上効果が期待されます。

壁面緑化

施設を印象づける壁面緑化は、遠景ではランドマーク機能も期待されます。

ハンギング植栽

既設の照明柱などを利用して設置します。目線より高くなるため、遠景からの緑視向上につながります。